

令和5年度都市科学部運営諮問会議議事録（案）

日 時 令和6年1月19日(金) 10時00分～11時40分

場 所 工学基礎研究棟2階201会議室（見学：建築学棟、シドモア桜、都市科学部講義棟）

出 席 （主 宰）藤掛洋子
（外部委員）平野雅之、宮坂久美子、師岡健一、青木優介
（学内委員）及川敬貴、河端昌也

欠 席 なし

議事に先立ち、藤掛学部長より挨拶があり、続いて、委員の紹介があった。

議 題

1. 議事録等の確認

資料2に基づき、令和4年度都市科学部運営諮問会議議事録（案）について、原案のとおり確認された。

2. 令和5年度に係る都市科学部の取組について

藤掛学部長より、事前説明から追加された資料や、事前説明において外部委員より挙げた疑問等について説明があり、及川委員、河端委員より補足説明があった。

3. 都市科学部への期待・提言

外部委員より以下のとおり、質問及び助言・提言があった。

（師岡委員）

都市科学部は非常に良い学びを実践していると考えているが、その学びについて学生がどのように感じているかを知ることは重要。卒業生への授業改善に関するアンケートはそれを知ることのできる貴重な機会であるが、学部全体の人数200名以上に対して91名の回答は少ないと感じる。そこで学生の声を確認して、行っている学びの良さを確認できると良いと考えているため、回収率を上げられるような工夫が必要である。現在は卒業式の日にアンケートを行っているようだが、最後の日にあるアンケートでは回収率も悪くなってしまうのではないかと。実施期間を検討し、別日にアンケート回答の期間を設けるなど、学生全体の意見がどのようになっているかを見ていただきたい。

(及川委員)

アンケートは自主的に学生が回答するもののため強制することが難しい。300人ほどがいるため、授業において、何かを自主的に行ってほしいと発信すると、学生は教員というよりは周囲を見渡して、周囲の学生が行っていないようであれば自分もやらないということが多い。そのような中ではあるが、時期や方法などを工夫して改善はしていきたいと考えている。

また、アンケートは高大接続センターが担当しており、大学全体としてアンケートの回収率は課題であり、全学で数年間改善するための工夫を重ねている。

(藤掛学部長)

強制できるものではないが貴重な資料のためアンケート自体の継続はしつつ、アンケートという形式にこだわらず、ゼミナール等で時間をとり、意見交換をしたものを質的データとしてまとめていき、データとして残す方法も考えられる。

(師岡委員)

目的は都市科学部の良さを再確認すること等にあるため、都市科学部独自のものを用意しても良い。

カリキュラムコンセプトについて、教職員と学生が協同して作り上げていることが素晴らしいと感じた。これも一種の学生の声であると思うが、このようなデータは広報にも使うことのできるデータになるのではないか。

(藤掛学部長)

教務・厚生委員長とも相談をして実施の時期等について検討をする。

(河端委員)

同じようなアンケートが異なる授業で毎回出されることもあり、学生がアンケート疲れをしていることも要因として考えられる。目的に応じた工夫が必要になってくる。

(青木委員)

アンケートの回答がないということは、特に意見がないことの表れであるとも見ることができる。強制した意見では、**必ずしも本質的でない意見**が来る可能性もあるが、受け取る側ではそれを判別できない。回答数は多いに越したことはないが、ある程度の質についても重要視していくべき。やはりいつ、どこで、どのように、ということを検討することが重要ではないかと考える。

(平野委員)

転職していく方、新卒でなく転入してくる方には様々な不安要素があることが考えられるため、従業員のエンゲージメントの把握は重要であると考えている。そのために様々なアンケートを実施しているが、回答率については同様に悩まされている。文章を書く量を少なくする、座談会や面談等を行うなど何とかして従業員の考えをくみ取ろうとしている。

先ほどアンケート疲れの話があったが、アンケートの統合や整理をすることで回答者になるべく簡潔かつ一度で回答ができるように検討している。

(宮坂委員)

アンケートについては同様の意見。

昨年度からアンケートが整理されており、改善がされていることが分かった。その中で、質問「22.都市科学部の一員であるという意識を持っている」、「23.所属学科の一員であるという意識を持っている」、「24.研究室の一員であるという意識を持っている」が追加されているがそれぞれの意図はどのようなものか。都市科学部、学科、研究室とスケールダウンするにつれてアンケート調査の結果は上がっているため、文理融合を実現するためには研究室の一員であることと同じくらい学部の一員である意識を持ってほしいということなのかと考えたがそれで間違いないか。

(藤掛学部長)

研究室に対する帰属意識は極めて高く、次点で学科に対する帰属意識があるが、そこで途切れてしまい、新設の学部ということもあったため都市科学部生としてのアイデンティティを持ってないということが初期にあった。教員たちもお互いどのように関わっていくかがわからない時期もあった。そこで、近い分野を探して協力できる点を見つけるなど、どのようにアイデンティティを醸成していくか、様々な試みを行っている。その試みについて、学生たちがどのように感じているかを確かめるためにそれぞれについて聞いている。

(河端委員)

新たに都市科学部が立ち上がった際、教員からも都市科学部がどういうものなのかという声が上がった。そこで、都市科学辞典をはじめに作成し、都市科学という領域をどのようなものにしていくかということをひとつにまとめ、どのように連携していくかを模索しながら進んできた。教員でさえそのような状態だったため学生にとってはなお難しく、都市科学部の全体像としては模索の途中段階なのではないかと考えている。

(藤掛学部長)

様々な場所から新たに学問を作るということで集まってきて連携しながら進んできた。今は地盤が固まってきているため、それを学生に伝えていき、アイデンティティを持っても

らえるように働きかける時期なのではないかと考えている。

ここで、YUC の代表をしている都市社会共生学科 3 年生の井上彩子さんより、YUC の活動について紹介があった。

(宮坂委員)

日本において、留学生を対象としているプログラムは多くあるが、子供の時に外国から来た等の事由により、日本語の能力がまだ十分ではない生徒を受け入れる枠が希少であることは課題である。ソクラテスプログラムについては、現在英語圏におり、日本語の能力は十分ではない生徒を対象としていたものか。

(藤掛学部長)

英語が授業の主要言語となる。ただ、学部が開催している日本語の授業も一定の条件を満たせば受けられる。他の留学生についても同様。日本語でのディベート等により日本語力も獲得してもらいたいと考えている。可能であれば様々な国の生徒に受けてほしいと考えている。親の都合により日本にいて日本国籍がないが、本国に帰ることができず、大学入学共通テストを受験できるほどの実力がないが、本国に帰ったら優秀な人材である生徒などは対象となっていないため、受け入れが課題となっている。これは日本の大学において少ないもののため、社会的な課題でもある。

(宮坂委員)

入学の際のレベルも見なければならないが、それよりも卒業後に素晴らしい人材を送り出すことができるかが重要であるため、新しい試みとして続けていただきたい。

ソクラテスプログラムは、現時点では留学生が対象となるプログラムなのか。

(藤掛学部長)

海外の経験が長い生徒が対象となるため、留学生に加え、帰国子女のように、日本人で海外に行っていた生徒なども対象となる。実際に都市社会共生学科で受け入れていた帰国子女の枠をこちらに移すような形をとった。

中南米の地域は戦前、戦後に多くの住民が出稼ぎに行ったり、移住したりをしており、日系社会が築かれている。現在は以前と比べて豊かになったこともあり、日本への支援等も行われている。そのような日本に縁のある生徒が日本と関わりを持ちたいと考えた時の受け入れ先になることも期待している。そのような日本にルーツがあり、日本に対しての思いがある人は新興国との懸け橋になり得る存在であると考えている。

補足として、ソクラテスプログラムは国際戦略推進機構が母体となっているが、受け入れの人数としては都市科学部に含まれている。

(青木委員)

就職の指導はどのように行っているか。

(及川委員)

大学院、学部ともに就職担当の委員がおり、そこに企業や官公庁から情報が集まってくるため、委員よりメール等で周知がなされる。学部推薦、大学院推薦が必要な場合には委員が窓口となる。

ただ、実状として就職活動は研究室に入ってから本格化していくために、研究室の指導教員が具体的なアドバイスをすることが多い。

(河端委員)

学生の先輩から後輩への助言等もスマートフォンなどの通信機器が進歩してから増えている印象がある。

(藤掛学部長)

OB 訪問について、学生から話を聞きたい業種の要望が出ることもあり、それを聞いて検討することもある。

(及川委員)

各研究室が企業への就職動向について公開しているため、それを見た 1、2 年生が事前知識を持つことができ、研究室選びの参考にしていることがある。

(平野委員)

30 代の教員が多く採用されたと先ほど及川副学部長より話があったが、これは意図的に行ったものか。

(及川委員)

本学では近年学長ができる限り若い人材を採用する意向を示しており、それに従った結果であると考えられる。

(師岡委員)

高校時代に社会的な活動も含め、こういった経験や資質を持った生徒たちが来ると好ましいか。

また、これから全ての生徒が新しい学習指導要領に移行するにあたり、情報が追加されるが、ICT についてどの程度まで習得しておくべきか。

(河端委員)

先日私費外国人留学生 (YGEP) の試験の中で面接を行った。自分の体験や背景に基づいて、志望理由等をしっかり自分の言葉で話せるようになっていることや、面接という場の中でのなるべくうまく対応しようとする形が見えると良いと感じた。今回は 15 分ほど面接の時間を設けることができたため、そういった面も見ることができた。これより、面接を担当した教員と 15 分ほどの時間を確保した面接の形はこれからも維持した方が良いのではないかと話していた。モチベーションを持って入学すると、自ら行動して学び、伸びていくため、面接の形式を維持して多くの側面を見ることで、そのような生徒を多く迎えたい。

(及川委員)

高校のカリキュラム内でやれること、やれないことは存在すると考えているが、学習について、暗記をすることは必要だが、ただ暗記をするのではなく、暗記を超えて批判できる能力が身についていると、大学に入ってから延びることが多いと考える。

(藤掛学部長)

自ら選び取る力が重要であると考え。授業が受け身で展開される高校までと異なり、大学は自分で学習内容を選択して学習を進めていく。自分が何を学習したいか、なぜそれを選択するかなどを熟考することが必要。

都市科学部は文理融合の教育を進めていることもあり、他学部よりも様々なことを学ぶことができる。そのため、選び取る力は他学部と比較しても重要となってくる。この力を身につけるためには、失敗の経験をしていくことが重要。

(及川委員)

アメリカでは授業の中で批判を繰り返し経験させることで批判できる能力を身につける。自分自身アメリカに渡るまでは批判することが難しいと考えていたが、何度も経験することで批判できる能力が身についた。このことより、批判できる能力はトレーニングにより身につけられる能力であることが分かった。高校、大学どちらであっても、それを繰り返し経験していくことが重要であると考えている。

4. その他

運営諮問会議委員は、運営諮問会議会場に掲示された各学科のポスター等に基づき、意見交換を行った。

(議事終了後)

運営諮問会議委員は、資料 8、6-7、6-6 で紹介されていた羽沢横浜国大駅周辺模型、シドモア桜、都市科学部講義棟 104 教室を見学した。

以上